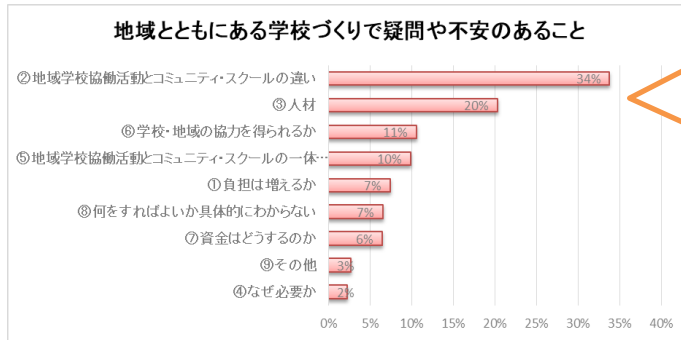


令和2年（2020年）1月24日（金曜日）
「地域とともにある学校づくり」推進フォーラム in 滋賀
トークセッションのまとめ

第1部：「持続」するために大切なこととは



参加者ニーズ

- 1 地域学校協働活動とCSとの違い
- 2 人材に関して
- 3 協力を得られるかの不安

「持続」のポイント

- ・「何のためか」（目的）を常に意識＝ねらいがぶれないように
- ・しんどい子どもを支えることを常に意識（地域と学校で共有したこと）
- ・「細く、長く」積み上げる。他校を参考にはするが意識はしない。
- ・変えること：会議の内容、具体的取組、地域と学校の役割の明確化
変えないこと：目的やCSのあり様、無理をしないこと

委員の選定、人材育成等について

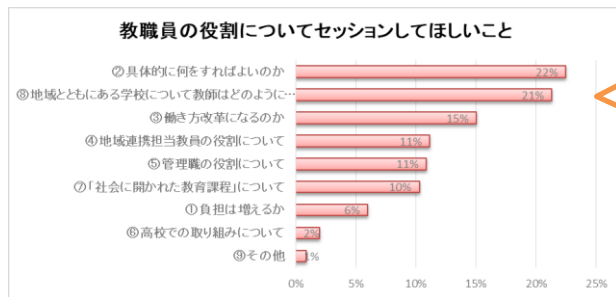
- ・委員の交代スパンを短く：何のために交代し、新たな方に担ってもらうかを委員と共有
委員経験者が地域活性化の次のステージで活躍できるように。
- ・委員の充て職は避ける：地域には汗を流してくださる人材が埋もれている。
いろいろな方と関わることの大切さ
- ・委員自身が育つ、喜びを感じてもらう。（役目として来てもらうだけでなく）
- ・地域は学ぶ意欲にあふれている。
- ・当事者として関わる委員選定→「担い手」となる方を。（説明だけ、言いつばなしの方ではなく）

CSと協働活動の違い

- ・P（Plan）はCS＝審議機関 D（Do）は協働活動＝アクション機関
- ・CSは「ミッション 課題の共有」 地域学校協働活動は「アクションの共有」
- ・なぜ2つ必要か？→学運協のLet'sだけではできない。（担い手が不明...）
協働活動だけでは「社会に開かれた教育課程」に収まりきらない。やったフリになってしまうことも。

第2部：教職員の役割とは

参加者事前アンケートより



参加者ニーズ

- 1 具体的に何をすればよいのか
- 2 教師がどのように捉えているのか
- 3 働き方改革になるのか

教職員の意識

- ・これからの社会に通じる「本物の力」を育みたい。→CSの可能性
- ・CSで「なにかやらなきゃ」からの脱却。PとDのバランス大切。
- ・校長の熱量が「魂」を吹き込む。
- ・CSでラクになるか？→そのことが目的ではない。もっと大きな効果がある。
- ・学運協の様子をリアルタイムで職員室に流す、全教職員が1回は会議に参加するなど、理解を深めるための手立て必要。
- ・熟議で教職員が「胸襟を開く」こと→動き出すポイント

事務職員の参画

- ・地域の方とファーストコンタクトできる立場。地域連携担当教職員として適任。
- ・予算、行政仕事など、教員にはない視点で関われる。

熟議・協働のポイント

- ・「みんなで決めた」が勇気になる。学運協で審議することで、地域の後押しが生まれる。
- ・スクラップ→学校だけではしにくい。一つの行事に地域等いろんな方が関わっているため。
地域と一緒に答えを出すことが大切。教職員の意識改革にもなる。
- ・サイレントマジョリティの存在を大切に→「声の大きい人」の意見だけに流されない。
- ・学校と地域はイコールパートナー→「一緒に」が合い言葉。
- ・「協働」：異なった立場の人が同じ目的のために対等な立場で活動すること。
大人が学びながら、新しい扉を開けるつもりで。
- ・だれもがチームになれる学校・地域に→チーム学校
- ・地域に求められること→スキル、熱い思いだけでなく「ボランティアマインド・子ども理解・学校理解」を大切に。
- ・先生方が「本音」を話し出す→学運協委員が聞くことが大切。
- ・思いがあっても方向性がちがうと大きな力にならない→思いを重ねる熟議の必要性。
- ・スクラップの基準がなければ思いつきの改革になってしまう。その基準を熟議する。

CSの成果：地域と学校の小さな成功体験の共有を積み重ねて

地域：知れば知るほど応援したい。

学校、教職員への理解が深まった。

校長：いざというとき頼りになる信頼関係ができた。

→ 困り感を共有できる関係 困難なときに一つになれる関係 学校からの困り感が訴えられたときに地域はよりアイデアを出せる。

○か×かでない判断を迫られたとき、学運協での協議後判断ができた。

→ 校長が判断するのに難しい部分に地域が寄り添う。

教職員：理解が深まった。（会議に出て）

職員室で話せないことも話せた。

地域で子どもが成長する様子を見て納得した。

その他運営のポイント等

- ・ 看板をつけかえる（評議員から学運協へ）だけでは本質、取組が変わらない。
- ・ 説明や文字だけでは教職員や地域に伝わらない。
- ・ CSは漢方薬のようなもの。カンフル剤でも新薬でもない。
- ・ ポイントは、「思いを重ねる熟議」「想いをカタチにする協働」「それを支えるマネジメント」。
- ・ CSで教育の質の向上と業務の効率化を図る。
- ・ CS未導入校長の9割が「すでに地域とよい関係にある」との回答データあり。どのレベルで「協働」するのかが問われている。
→ “おいしいケーキ” は知っていても、“ほんとうにおいしいケーキ” を知らない。
- ・ 子どもの未来のために、地域の未来のために、自分の経験を自分の言葉で語り合うストーリーテラーをめざしたい。